



# SKILL UP

スキルブラッシュアップ

# BRUSH UP



## 大学生のスタディ・スキルズ ―「本物の勉強」をしよう―

高松正毅

1 一歩を踏み出す前に  
「何を」「どうしたいか」を  
明確化・具体化しよう!

皆さんはこれから4年間を、ここ高崎経済大学で過ごす。今後の長い自らの人生に、この4年間を、まず位置づけてもらいたい。具体的には、卒業時、すなわち4年後の自分の状態、向上の変容を遂げた自身の姿を、明確に思い描いてほしいのだ。簡単に言えば「何を」「どうしたいか」である。この4年間で獲得向上すべき「スキル」と言い換えても良い。そして現状とその理想状態を引き比べ、これからの毎日はいかに生きるべきかを具体的に決めてほしい。

「スキル」とは、運用能力のことである。皆さんは「実用」性に極めて敏感だが、「実用」とは、目的や用途が明確な場合にのみ言えることだ。ところが、多くの学生がただ漠然と「英語が話せるようになりたい」「文章が書けるようになりたい」と口にする。言ってみれば、「コミュニケーション能力」の向上だが、「誰

に」「何を」なしに「コミュニケーション」など存在し得ないことにどうして気づかないのだろうか。結局、「出来るようになりたい」というのはただの気分ではなく、何の変化も起こらないまま卒業して行くことになる。

出発点(現状)と目的地(理想状態)の2つは、具体的かつ明確な認識として常に必要である。漠然と生きる者は、漠然と人生を終えて行く、何一つ手にしないままに……。

さて、現状の認識・把握をし、4年間の目標は定まっただろうか。2つの点を結ぶ直線は一本に定まる。だから、その直線をただひたすら突き進めば良い。しかし我々の進む道とする道はいつもそう思い通りにいくものではないし、最短の近道を通ることが人生では最上とも限らない。道草、寄り道、回り道、……大いに結構である。大切なのは着実に歩を進めているかどうか、時間がつまっているかどうかだ。つまらない人生を生きるのだけはよせ。

履修科目の選択決定から、授業に臨む姿勢、講義の聴き方、ノートの取り方、本の読み方に至るまで、具体的な学習行為の一つ一つが、目的達成に向かったものでなければならぬ。ただ乗り切れば良いと適当にごまかそうとするならば、最初から大学に来る必要などない。

皆さんがしなければならぬのは、「本物の勉強」だ。やれと言われたことをただこなすのは、本物の勉強ではない。自発的でない勉強は勉強ではないのだ。高校までの受け身の姿勢から、「自ら進んでやる」積極的・能動的・主体的な姿勢への転換こそが、大学生となるために必須である。

## 2 大学生として 最初に最低必要なこと

### STEP1

「解答」「正解」に対する思いこみを棄てよう  
——「問題」は発見するもの——

皆さんが今まで解いてきた高校までの試験問題、あんなものは本物の問題ではない。誰かが君たちの能力を判定、すなわち点数をつけるために無理矢理作ったものだ。答えは一つに定まるように仕組んである。

ところが我々が取り組むべき問題の多くは、答え

のないもの、あるいは答えの出にくいものだ。または答えが複数考えられるものだ。だから、「答えは出る」とか「答えは一つ」といった思い込みをまず棄てる必要がある。皆さんには、「答えはあらかじめ用意されている」と決めてかかっているふしが見られる。さらには「答えは一つしかない」と思い込んでいるようでもある。試験問題はそのように作ってあるからそれで当然だが、本物の問題は必ずしもそうではない。

他人の作った問題に答えを出す能力は、あくまで「試験対策用」でしかない。大学生に必要なのは、問題を発見する能力、すなわち、自分で「問題を発見し、問題を作る」能力だ。

#### MASAKI TAKAMATSU

経済学部助教授。  
専門は国語学・言語学。「日本語概説」「日本語研究」「文章表現Ⅰ・Ⅱ」「論文作法Ⅰ・Ⅱ」を担当。

「新選組」と「白虎隊」を愛する。尊敬する人物は「榎本武揚」「土方歳三」ら多数。嫌いなものは「薩摩と長州」。誓いの言葉は「臥薪嘗胆」。入場テーマ曲:「アイ・オブ・ザ・タイガー(サバイバー)」&「ターミネーターのテーマ」

### STEP2

「質問力」を身につけよう  
——自分の頭で考え始める第一歩——

大学生になっても覚えなければならぬことはたくさんある。知識はどこまでも大切だ。しかし、高校まではただ知識を詰め込めばそれで良かったが、大学ではその知識をもとに自分の頭で考えられなければならない。そのために最初に必要となるのが、「質問力」だ。質問するなんて簡単だと思うかもしれない。ところが、ほとんどの大人がまともに質問することができないのが現実なのだ。

「Aは何ですか?」 こういう質問は本来あってはならないものだ。これこそが高校までの質問である。単語の意味のような、調べれば分かる程度のことを尋ねるのは、無知であることの証明だ。自分からは何もせず、丸ごと全部聞こうとするのは、学ぼうとする者の取るべき態度ではない。

「Aとは、……の意味だと思っていたのですが、その意味ではここは理解できません。何か別の意味でしょうか。」このAを、先述のAと同じ意味に取るという意味がよく通じません。どういうことでしょうかか。のように、必ず他との関係から、分かなさ加減、分かなさの具合、分かなさの状態を詳細に伝えなければならぬ。質問するにも質問の仕方というものがあるといふわけだ。

だから、一つのことだけを知っていても思考を始めることはできない。思考に必要なのは、比較、対照、対比など、二つ以上のものを併せ考える能力である。

勉強は仕事を呼ぶ。その知識を人に伝える努力をしよう。そして、自分の考えを人に伝える努力をしよう。  
さあ、これからが「本物の勉強」だ!

### STEP3

「情報収集力」を身につけよう  
—活字を読む、まずは新聞・雑誌から—

情報収集力というと、すぐにインターネットの検索技術を思い浮かべるかもしれない。もちろんそれも重要だが、テクニクなどは現実の場数を踏みながら自然と鍛えられて行くものだ。より根本的に大切な作業がある。それは活字を読むこと。映像(テレビ)ではダメだ。学生諸君の活字離れは言語に絶するものがある。読むのは「マンガだけ」ではあまりにも寂しい。

たとえば、大好きなタレントがいるとして、その人のことだったら全て知りたいと願うのがファンというものだろう。そのタレントが出演する番組やCMは見逃さないだろうし、雑誌のインタビューや新聞記事にもすぐに目が行くはずだ。意識せずとも自然と情報が目に飛び込み、体内に摂取蓄積されていく。しかし、「君たちの生きる社会」は、かなり意識して「読み取る」努力をしないと、いつまで経ってもぼんやりとした状態のままだ。就職活動をする段になって慌てても、もう遅いのである。

だから、まず新聞を毎日読むこと。購読するのが当然だが、そう出来なくても図書館にはあるし、ウェブ上でも読める。とはいっても、いきなり国際面・政治面・経済面・社説では取っつきづらいというなら、1面(トップ記事)と3面(事件記事)など、身近な出来事にだけでも目を通そう。次には文化欄やコラム、書評や投書欄など、他人の考えを知ろう。また週刊、月刊を問わず、雑誌の記事にも目を通す習慣をつけたい。

### STEP4

「論理的思考力」を鍛えよう  
—全ては「発信」するために—

プレゼンテーション(発表)をしたり、レポート(報告書)を書いたり、最後に待っているのが、自ら情報を「発信(発信)」することだ。発信するには、内容(コンテンツ)がなければならぬ。内容とは、自分の考え・自分の意見だ。自分の意見を持つためには、自分の頭で考えなければならぬ。

「自分の考え・意見」とは、感覚や感想、印象や気分のことではない。論理的に説明できる独自の見解のことだ。「論理的に説明する」とは、根拠を明らかに示した上で、そう考える理由を説得的に語れること

である。

コップに半分の水を見て、「もう半分しかない」と考えるか、「まだ半分ある」と考えるか。学校のチャイムを聞いて「授業の終わり」ととらえるか、「休みの時間の始まり」ととらえるか。同じ一つの事実でも、見方によって様々な分析、解釈、判断が可能だ。大事なのは、下された判断や結論の方ではない。そう考える理由や根拠、裏付けの方だ。何をどう考えても良いが、そう考えるわけを、説得的に語れなければ無意味である。

誰かの受け売りではなく、また誰の力も借りずに、様々な事実からの確かな判断が下せる能力こそが、最も求められるものである。

## 【読んでみよう】

### 中級編

小浜裕久・木村福成  
『経済論文の作法 勉強の仕方・レポートの書き方』  
日本評論社

書名は「経済論文の作法」とあるが、勉強の仕方がよく分かる。1998年に増補版が出て以来改訂されていないため、冒頭のパソコンに関する記述は全く古くなってしまった。早急なる再改訂が望まれる。

「研究の技術」について書かれた書である。これから卒業論文を書こうとする人から大学院や研究者など、上を目指す人向け。しかし、早めに読んでおいて絶対損はない。

飯田泰之  
『経済学思考の技術 論理・経済理論・データを使って考える』  
ダイヤモンド社

これも書名に驚かされてはならない。第一章では、そもそも「議論」とは何か、から説き始め、演繹法や帰納法、三段論法などを用いながら論理的思考とはいかなるものかをかみくだいて解説する。第一章だけでも絶対必読の一冊である。